

検査前プロセスの重要性

◎竹林 史織¹⁾浜松医科大学医学部附属病院¹⁾

我々の検査結果に対する品質（質）保証（検査前、検査、検査後プロセスの管理）は、臨床検査の基本の業務である。従来から、検査プロセスの内部精度管理として、一定間隔で管理試料を測定し、機器・試薬の性能を評価する統計的品質管理法（statistical quality control: SQC）が用いられてきた。具体的な解析は、 $\bar{X}$ -R、 $\bar{X}$ -Rs-R 管理図で分析装置・試薬の異常を検出するのが一般的である。近年、分析技術の進歩により、中央検査室で行う検査プロセスのエラーは減少し、検査前プロセスのエラー管理が中央検査室での課題となってきた。

現在の日常検査業務の中で、検査前、検査後プロセスに関して、検査プロセスと同等に評価（時間や労力）しているだろうか？臨床検査の現場では患者の生活習慣（運動、喫煙、飲酒）や食事、体位、患者に使用されている薬剤、漢方、サプリメントや採血の手技、採血管の選択、採血後の検体保管状況、遠心条件など検査結果に変動を与える要因は数多く存在する。検体は適切に採取され、測定されないと検査結果の正しい解釈はできない。つまり、これらの変動要因は日常検査において一定頻度で発生するため、それを把握・管理することが臨床検査技師に求められる。さらにそれらの情報から統一したデータ判定を行い、顧客（患者、医師など医療従事者）に提供することが、これからの質保証として必須である。しかしながら、データ判定については未だ明確に標準化はされていない。

本シンポジウムでは検査前プロセスのエラーによって検査値に影響を与えた事例を挙げ、これらの対応と異常データの検出法について紹介する。これらの知見を議論・集積し、“NEXT ONE！”で異常データ判定の標準化を進めていくことが我々の使命と考えている。